和洋女子大学紀要　第五十七集　一三―二四（二〇一七・〇三）

【審査論文】

『此ほとり』「薄見つ」歌仙分析

An Analysis of *Konohotori*

佐藤勝明

Katsuaki SATO

要旨

俳諧史上の傑作の一つとして知られる『此ほとり一夜四歌仙』の中から、巻頭の「薄見つ」歌仙を取り上げ、各付合の分析を通して、蕪村連句の特色を探る。それぞれの付合は、①〔見込〕、②〔趣向〕、③〔句作〕の三段階による分析方法を使って読み解いていく。その結果として言えるのは、古典趣味や中国趣味など、題材の偏りが多分に見られること、前句をよく検討してから趣向を立てるのではなく、前句の詞や表現から喚起されたこと（それは自分たちの嗜好にかなう方向で多く選ばれる）をもとに付句を考えていくこと、の二点である。すなわち、芭蕉流の付合手法とは異なる面が多く、蕪村一流の美的世界が構築されているのであり、今後は、そのことを前提に蕪村連句と取り組むことが肝要と言える。

キーワード：　俳諧・蕪村・連句・此ほとり一夜四歌仙

蕪村の研究においてあまり盛んとは言いがたい分野の一つが、連句に関することであろう。『蕪村全集』第二巻（講談社　平成13年刊）が刊行され、すべての蕪村一座作品に対する注解が公になった後も、蕪村連句についての論文や注釈が多く発表されているという状況にはない。拙稿「蕪村連句の傾向―『もゝすもゝ』の分析から」（『文学』17―2　平成28・3）は、そうした事態に対する自分なりの試行として書いたものであり、蕪村と几董が書簡によって巻いた二歌仙を収める『もゝすもゝ』（安永九年刊）を対象に、その傾向を探ったものである。結論的なことを確認しておけば、その一として、蕪村・几董が奇談的な内容を好み、変わった題材を使用しがちだということがあり、その二として、前句を見極める前に、前句からひらめいたことがらによって一句をなしがちだということがある。すなわち、「作者は、前句の吟味に腐心するのではなく、気分に頼った自分好みの趣向立てをした上で、

一句を磨くことに傾注する」のであり、その結果、「絢爛にして多彩な三十六句が現れることになる」のであった。これが『もゝすもゝ』だけのことではなく、蕪村連句に広く見られる性格なのかどうかを見定めるため、ここでは、その七年前に公刊された、蕪村編『此ほとり一夜四歌仙』（安永二年刊）から巻頭の「薄見つ」歌仙を取り上げ、各付合を分析していくことにしたい。安永二年の九月、蕪村・几董が上洛中の樗良を伴い、嵐山の病床を見舞った際に、一夜で四吟による歌仙四巻を興行したものであり、「その高邁な精神と自由な作風は、安永期最高の連句集と評すべき内容を備えている」（角川書店『俳文学大辞典』）とも評されるものである。なお、付合の分析にあたっては、①作者は前句をどう理解し、とくにどの点に着目したか〔見込〕、②その見込に基づき、この句ではどのような場面・情景・人物像などを描こうと考えたか〔趣向〕、③その趣向に従い、どのような素材・表現を選んで一句にまとめたか〔句作〕、という三段階による分析方法を用いる。先行する注釈書には、『蕪村全集』（『全集』と略記）のほか、日本古典文学大系『蕪村集　一茶集』（岩波書店　昭和34年刊）、昭和女子大学連句研究会編『蕪村連句研究』（武蔵野書院　昭和37年刊）、野村一三著『蕪村連句全注釈』（笠間書院　昭和50年刊）、暉峻康隆監修『座の文芸蕪村連句』（小学館　昭和53年刊）、中村幸彦著『此ほとり一夜四歌仙評釈』（角川書店　昭和55年刊）、栗本幸子著『此ほとり一夜四哥仙全評釈』（私家版　平成13年刊）などがあり、略称をもって適宜に利用した。底本には『天明俳書集一　蕪村七部集』（臨川書店　平成3年刊）所収の影印を用い、句の掲出にあたっては、原典に忠実であることを第一義としつつ、字体は通行のものに統一し、濁点と振り仮名を私に付した。

薄見つ萩やなからん此辺　　蕪村

発句　秋七・八月ないし三秋（薄・萩）

〔句意〕このあたりで薄を見た、萩もきっとあるはずであろう。

〔備考〕「や」は反語の係助詞で、この「…やなからん」は強い肯定を示す。「薄の風情は老嵐山、萩の風情は、花々しく活躍し出した樗良を、指している」（中村『評釈』）と見て、問題はない。「薄」は『せわ焼草』等に七月、『増山井』等に八月、『はなひ草』等に兼三秋の扱い。「萩」は『はなひ草』等に七月、『毛吹草』等に八月の扱い。蕪村には「薄見つ萩程ちかく思ふ哉」（『落日庵句集』）の吟もあり、これを初案とする見方（碧梧桐『蕪村名句評釈』〈非凡閣　昭和9年刊〉）もある。

風より起る秋の夕に　　樗良

脇　三秋（秋の夕）

〔句意〕秋の夕べ、風が寄り集まって生じる。

〔付合〕①前句を薄や萩が生えている光景と見定め、②それらを揺るがす風を想定し、時分は夕暮れが適当と考え、③秋の夕方に風が寄り起こっているとした。

〔備考〕「より起る」は「寄り起る」で、ここは集まったようにして風の起こること。薄と萩はともに風に揺れる秋の植物であるから、この句に「風」を出したのはきわめて順当。発句の挨拶を受け、「ここに一座する夜半亭の人々は…中興新風の運動を開始したこと」（中村『評釈』）を揚言し、挨拶を返したものであろう。

舟たへて宿とるのみの二日月　　几董

第三　秋八月ないし三秋（二日月）　月の句

〔句意〕舟も絶えて宿をとる以外にすべがなく、空には二日月が掛かってい

る。

〔付合〕①前句の夕方に起こる風という点に着目し、②心細い思いをしている旅人を想定し、③二日月の下、舟もなくて宿を探すしかないとした。

〔備考〕「たへて」は「絶えて」でなくなること。「二日月」はきわめて細く、不安な感じを与える。②から③の過程では、『全集』に指摘があるように、「風→舟」「夕→旅の宿かる」（『類船集』）の一般的な連想が働いていよう。

紀行の模様一歩一変（いっぽいっぺん）　　嵐山

初オ4　雑

〔句意〕紀行のありようは一歩ごとに一変するほど多彩である。

〔付合〕①前句を旅の記に描かれた一齣と見て、②それはとても変化に富んだ内容であると考え、③紀行の模様は一歩一変ともいうべきものであるとした。

〔備考〕「紀行」は旅中の体験・見聞・印象などを記したもの。「一歩一変」は少し歩くと景色や趣などが大きく変わることであろう。

貫之（つらゆき）が娘おさなき頃なれや　　樗良

初オ5　雑

〔句意〕貫之の娘が幼いころであったことよなあ。

〔付合〕①前句の変化に富む紀行という点に着目し、②それを紀貫之の遠国への旅と特定して、③貫之の娘がまだ幼いころであったとした。

〔備考〕「貫之」は平安時代の歌人である紀貫之。その著した『土佐日記』には、幼い娘を任国の土佐で亡くしたことが見える。「なれや」は断定の助動詞「なり」の已然形に間投助詞「や」が付いたもので、詠嘆を示す。

半蔀（はじとみ）おもく雨のふれゝば　　蕪村

初オ6　雑

〔句意〕半蔀は重く、雨が降っているので。

〔付合〕①前句における貫之の娘の幼少期という点に着目し、②その日常の一場面を描こうと考え、③雨の降る中、半蔀が重くて揚げかねているとした。

〔備考〕「半蔀」は上半分を釣り上げるようにした蔀。「蔀」は板の両面ないし片面に格子を組んで作った建具で、寝殿造りに用いられる。

さよ更（ふけ）て弓弦鳴（ゆづるなら）せる御（おん）なやみ　　嵐山

初ウ1　雑

〔句意〕夜更け方、ご病気のお方のために弓の弦を鳴らして魔を祓う。

〔付合〕①前句を王朝時代のことと見定め、その陰鬱な気分にも着目して、②妖魔のために患っている人を想定し、③夜も更けて鳴弦の法でご病気に対処するとした。

〔備考〕「さよ」は「小夜」で夜に同じ。「弓弦鳴せる」は弓の弦をはじいて音を出す「鳴弦」のことで、天皇家や貴人の入浴・出産・病気などに際して魔を除くために行なった。「なやみ」は「悩み」で病気の意。

我もいそじの春秋（しゅんじゅう）をしる　　几董

初ウ2　雑

〔句意〕私も五十歳という年齢を数えるようになった。

〔付合〕①前句を重篤な身の老人に対する措置と見込み、②その人のことを知る同年配の者の述懐しそうなことを想像し、③気づけば自分も五十路（いそじ）を迎えていたとした。

〔備考〕「いそじ」は「いそぢ」が正しく、「五十路」で五十歳のこと。「春秋」

は年齢。「前句の貴人に対し、侍臣の述懐を付けた」（『大系』）と見ることもできる。

汝にも頭巾着せうぞ古火桶　　蕪村

初ウ3　冬十・十一月ないし三冬（頭巾・火桶）

〔句意〕古火桶よ、お前にも頭巾を着せてやろうではないか。

〔付合〕①前句を自分の年齢にしみじみした思いを感じている人と見て、②隠居した人が身近な古道具を感慨深く見るさまを想定し、③古い火桶にも頭巾をかぶらせてやろうかと戯れかかる場面とした。

〔備考〕「頭巾」は頭や顔を覆う布製のかぶり物で、『毛吹草』『増山井』等に十月、『はなひ草』等に兼三冬の扱い。「火桶」は木製の丸い火鉢で、『増山井』等に十月、『はなひ草』等に十一月、『せわ焼草』等に兼三冬の扱い。『全集』に指摘があるように、「老人→頭巾」「年寄→火桶」（『類船集』）の一般的な連想にもよっていよう。

愛せし蓮は枯てあとなき　　樗良

初ウ4　冬十月ないし三冬（蓮は枯て）

〔句意〕愛した蓮は枯れて跡形もない。

〔付合〕①前句を飄逸な隠逸者の独言と見定め、②「愛蓮説」への連想から、屋外には蓮池があるものと考え、③そのいつくしんだ蓮も今は枯れ果てているとした。

〔備考〕「蓮」は夏季の植物で、「破蓮」は秋季。「名草枯る」が『はなひ草』等に十月とされ、『無言抄』『御傘』等に「冬なり」とされることから、「枯蓮」も冬季と見て間違いない。「愛せし蓮」とあれば、周茂叔「愛蓮説」（『古文真宝後集』等）が念頭にあるに相違なく、その中に「蓮ハ花ノ君子ナル者也」とある。中村『評釈』が、「樗良の頭の中で、頭巾即ち周茂叔即ち「愛蓮説」と回転したのではないかと、一寸気になる。周茂叔以下…の肖像は、皆儒服をまとって、頭巾を冠っている。…樗良の頭のどこかに古風な付け方が残存していたとなるのだが、どうであろうか」と控えめに指摘したことは重要で、この付合の根底にあるのは、おそらくそうした詞の連想にほかならないであろう。

小鳥来てやよ鶯のなつかしき　　几董

初ウ5　冬十月ないし三冬（鶯のなつかしき）

〔句意〕小鳥が来ているな、やあお前に言づけを頼みたい、鶯の初音が慕わしいと。

〔付合〕①前句を冬枯れて寒々とした池の光景と見て、②その周囲に目を転じつつ、春を待つ思いを詠もうと考え、③やって来た小鳥に鶯が恋しいとの伝言を頼むとした。

〔備考〕「小鳥来る・小鳥渡る」は秋の季詞ながら、この句の場合、「前句の季と初春の鶯を待ち望む意とによって、冬季と定め」（『大系』）てよかろう。ちなみに、「鶯の子鳴」は『毛吹草』等に十月とされ、「鶯の子」は『袖かゞみ』等に十一月とされている。「やよ」は呼びかける際に発する語で、中村『評釈』によれば、和歌では多く「時鳥に呼びかけたり、言づけたりする時の言葉である」という。そして、「時鳥から小鳥にかえた」この句は、「小鳥よやよ伝言したいことがある。仲間の鶯に云ってくれ、…早く訪れてほしい」の意になるという。確説というべきであろう。ただし、三句の展開を見た場合、前句をはさみ、火桶に呼びかける句と小鳥に呼びかける句が向き合う形になり、感心しない。

さかづきさせば逃る県女　　嵐山

初ウ6　雑　恋（逃る県女）

〔句意〕盃に酒をついで飲ませようとすると田舎の女は逃げていく。

〔付合〕①前句の「やよ…」を人に対する呼びかけと見換え、②庭前の景を眺めながら戯れ言を言う酒宴の場を想定し、③田舎の娘は盃を勧められて逃げていくとした。

〔備考〕「県女」は田舎娘の意で、『蕪村連句』は「嵐山の造語であろうか」とする。眼前の鳥にかこつけて、都のあれこれが懐かしくてならないから、せめてはお前が慰めてくれなどと、宴席に出ている女をからかったのであり、一句は恋と見て問題ない。

若き身の常陸介に補せられて　　蕪村

初ウ7　春一月「常陸介に補せられて＝県召」。

〔句意〕若い身でありながら常陸介に補任されている。

〔付合〕①前句で逃げたのが県女である点に着目し、②盃をさしたのは対照的に都から来た高位の者であると考え、③若い身で常陸介に任じられているとした。

〔備考〕「常陸介」は常陸国（現茨城県）を治める国司の次官。上総・常陸・上野の三国に関しては、親王が守（長官）となり、当地には赴かないのが常であるため、実質的な政務は介が取り仕切った。こうした地方官の任命式を県召の除目（略して県召）といい、毎年正月十一日からの三日間に行なわれた。「県女→県召しの連想」（『全集』）は確実にあったと考えられるものの、この句まで「恋」（同）と見る必要はない。

八重のさくらの落花一片　　几董

初ウ8　春三月（さくら・落花）　花の句

〔句意〕八重桜の一片が落花した。

〔付合〕①前句が晴れがましい人事である点に着目し、②これにふさわしい戸外の情景を探り、③八重桜の落花がひとひら舞っているとした。

〔備考〕「一片」は薄いものの一枚をいい、ここはひとひらの花びらをさす。前句を県召の場に見換えたとすると、落花とは季が合わず、やはり、打越と前句で描かれた宴の背景を付けたと考えざるをえない。ならば、三句がらみの難は避けられないであろう。

矢を負し男鹿来て伏す霞む夜に　　樗良

初ウ9　三春（霞む）

〔句意〕霞がかかった夜に、矢を射られた男鹿がやって来て横たわる。

〔付合〕①前句を八重桜が満開のさまと見込み、②その下に展開するであろう椿事を想像し、③矢を負った牡鹿が来て伏す霞の夜であるとした。

〔備考〕「矢を負し」は矢を身に受けたの意。「霞→花の岑・春の野」（『類船集』）は一般的な連想の範囲。「鹿」の本来的な季は秋であり、同じく秋季の「花野」とは付合語の関係（『類船集』に「鹿→花野」）。その組み合わせを承知の上で、敢えて秋草の花野ならぬ八重桜の下に手負いの鹿を配した点が、作者としては得意なのであろう。その意味でも、まさに「技巧的でありすぎる」（『大系』）と言える。

春もおくある月の山寺　　蕪村

初ウ10　三春（春…月）　月の句

〔句意〕春もようやく山奥にまで到達し、月が山寺を照らしている。

〔付合〕①前句で手負いの鹿が来て伏したという点に着目し、②その伏した

のを山奥のとある場所と考え、③そこはやっと春めいてきた月下の山寺であるとした。

〔備考〕「おくある」は「奥ある」で奥行きがあること。「春もおくある」とは、麓と山奥では春の到来にも時間差があることであろう。諸注が挙げるように、後鳥羽院宮内卿の「見渡せば麓ばかりに咲きそめて花もおくあるみ吉野の山」（『続古今集』）を踏まえた措辞と見られる。「霞→薄キ月影」（『類船集』）は一般的な連想の範囲。付け方は、諸注のいう通り、「手負いの鹿の来たり伏す場を定めた」（『大系』）ものに相違なく、そうすると、打越と前句では花の下に倒れる鹿、前句と付句では山寺辺の月下に倒れる鹿となり、観音開きの難は避けがたいことになる。

大瓶（おほがめ）の酒はいつしか酢（す）になりぬ　　几董

初ウ11　雑

〔句意〕大きな瓶の中の酒はいつの間にか酢になってしまった。

〔付合〕①前句を春の訪れが遅い山奥の寺と見定め、②参る人もほとんどいない閑散としたさまを想定し、③大瓶に入った酒もいつか酢になっているとした。

〔備考〕「大瓶」は、『邦訳日葡辞書』（岩波書店）にタイヘイの読みで「葡萄酒の瓶のような大きな器」とあるものの、ここはオホガメと訓で読むべきであろう。「酢になりぬ」は、放っておいた酒が酸化して飲めなくなること。『全集』に指摘があるように、「酒→月の詠」（『類船集』）の連想が介在していると同時に、「花の時にそなへてたくわえておいた大がめの酒も、春の訪れのおそいままに、いつしか酢となってしまった」（『大系』）ということなのであろう。

五尺の剣打（つるぎうち）おふせたり　　樗良

初ウ12　雑

〔句意〕五尺もの剣を作り上げたことだ。

〔付合〕①前句の大量の酒がだめになったという点に着目し、②それほど長く酒を断っていたのは何か訳があると考え、③精進して取り組んだ五尺の剣をようやく仕上げたとした。

〔備考〕「五尺」は約一・五メートル。「五尺の剣」は「頗る大きい神宝の類の太刀」（中村『評釈』）と見るのがよく、「打おふせたり」は刀匠がそれを製作し終えたということ。諸注が指摘する通り、「精進潔斎の姿」（『大系』）を想定することで、二句はつながるわけである。

満仲（まんちゅう）の多田の移徒（わたまし）日和（ひより）よき　　蕪村

名オ1　雑

〔句意〕満仲が多田に移転される日はよい天気である。

〔付合〕①前句のやっと剣ができたという点に着目し、②それは名だたる武士から祝儀の品として注文されたのだと考え、その祝い事の内容を探って、③上天気の日に満仲が多田への転居を果たすとした。

〔備考〕「満仲」は平安時代中期の武将である源満仲（みつなか）。摂津国多田（現兵庫県川西市の地名）の新田城に移住したことから、多田満仲（ただのまんじゅう）と呼ばれる。「移徒」は「移徙」が正しく、多くは貴人が転居すること。

若葉が末に沖の白雲　　几董

名オ2　夏四月（若葉）

〔句意〕若葉が茂るその末の先には、沖の白雲が見えている。

〔付合〕①前句が晴天の下での移徙である点に着目し、②その際に目にする

であろう情景を想像し、③若葉の先に広がる海の沖には白雲が浮かぶとした。

〔備考〕『全集』に指摘があるように、『類船集』に「日和→雲出る」とある。

松が枝は藤の紫咲のこり　　樗良

名オ3　夏四月（藤の…咲のこり）

〔句意〕松が枝のあたりには紫色の藤が咲き残っている。

〔付合〕①前句が沖の白雲という大景をとらえた点に着目し、②その遠景に対する近景を探り、③庭前の松の枝には藤がまだ咲き残っているとした。

〔備考〕「藤」は春の季詞ながら、ここは「咲のこり」とあるので、初夏の景と見て間違いない。『蕪村連句』は『源氏物語』「藤裏葉」に「この花の…夏に咲きかかるほどなん、…あはれにおぼえはべる」とあることを指摘する。中村『評釈』が指摘するように、松と藤波の組み合わせは和歌以来の常套的なもの。芭蕉の「幻住庵記」（『猿蓑』）にも「春の名残も遠からず、つゝじ咲残り、山藤松に懸て」とある。

念仏申て死ぬばかり也　　蕪村

名オ4　雑

〔句意〕念仏を唱え申して死ぬばかりである。

〔付合〕①前句を来迎図に描かれた庭前の景と見込み、②そこに描かれているはずの往生を願う人物を想定して、③念仏を口にして死ぬばかりの身であるとした。

〔備考〕前句との関係は、「藤の紫を、来迎の紫雲に見立てての付け」（『大系』）と見られており、諸注、『方丈記』『平家物語』や謡曲・和歌などを参考に挙げる。中でも、来迎図には「松にかかる紫の藤の景があしらわれている」（中村『評釈』）との指摘は重要で、画家である蕪村が前句から来迎図を想起した可能性はきわめて高い。「来迎図」とは、諸菩薩を従えた阿弥陀如来が念仏行者を浄土に導くため迎えに来るさまを描いたもので、「紫雲」は、その際に阿弥陀如来が乗っているとされる紫色の雲。

我山に御幸のむかししのばれて　　几董

名オ5　雑

〔句意〕わが山に御幸のあった昔が偲ばれる。

〔付合〕①前句を安らかな死を待つばかりの身の上と見込み、②これを老僧のこととして、その人が栄えあるできごとを思い出す場面を想像し、③山に御幸のあった昔がなつかしいとした。

〔備考〕「我山」は「我寺」というも同じで、『蕪村連句』等はこれを「比叡山」と特定する。「御幸」は上皇・法皇・女院の外出を敬っていう語。

逃たる鶴の待どかへらず　　樗良

名オ6　雑

〔句意〕逃げてしまった鶴は待っても帰ってこない。

〔付合〕①前句を山に隠れ住む人の懐旧と見換え、②その人が常に思い出すもう一つ別の旧事を案じて、③逃げた鶴は待てども帰らないとした。

〔備考〕「鶴」からただちに想起されるのは、諸注がいう通り、孤山に隠棲して鶴を愛した中国北宋時代の林和靖の故事（『世説新語補』等）であり、樗良がこれを念頭に置いていた可能性は十分にある。さらに、中村『評釈』は、『円機活法』に失鶴詩がいくつも見られることを指摘する。

銭なくて壁上に詩を題しけり　　蕪村

名オ7　雑

〔句意〕銭もないまま壁の上に詩を書き付けた。
〔付合〕①前句を逃げ去った鶴を見やっていると見換え、②崔顥の詩句を介して、詩人が詩作する場面を想像し、③金銭がなくて壁上に詩を記すとした。
〔備考〕「詩を題し」は詩を書き記すこと。「「黄鶴楼」の故事を想起させる」（『蕪村連句』）付合であり、その故事とは、『部昌志』によれば、老人（仙人）が酒代の代わりに壁に描いた黄鶴が歌に合わせて舞ったことから店は大繁盛、その十年後、再び現れた老人が鶴に乗って飛び去ったことを記念して、酒屋が楼を建てたというもの（その高楼は現湖北省武昌県の西の黄鶴山上に揚子江に臨んで建てられ、現在もほぼ同位置に再現されている）。中村『評釈』は、「句中の貧詩人に詩を書かせた楼は、…鶴に縁のある黄鶴楼に定めるべき」とし、崔顥「黄鶴楼」（『唐詩選』）に「黄鶴一タビ去ツテ復タ返ラズ」とあることを指摘する。すなわち、蕪村は前句からただちにこの詩句および故事を想起して、漢詩人がいかにも行ないそうなことを創作したわけである。

灯を持出る女麗し　　几董

名オ8　雑　恋（女麗し）
〔句意〕灯火を持ってきた女の何ともうるわしいことよ。
〔付合〕①前句を貧書生の行為と見定め、②対照的な人物がこの部屋を訪ねる場面を想像し、③灯火を運んできたのは美しい女であるとした。
〔備考〕「麗し」は容貌が美しいことで、「麗人」のイメージを利かせたものであろう。中村『評釈』は、白話小説に見られる貧書生と令嬢の関係が、几董にも影響を与えた可能性を示唆する。

黒髪にちら〳〵かゝる夜の雪　　樗良

名オ9　冬十一月（雪）　恋（黒髪）
〔句意〕黒髪に夜の雪がちらちらと降りかかる。
〔付合〕①前句を戸外に灯火を持ち出したものと見換え、②恋しい男を門口まで出迎えに行く場面を想定し、③ちらちらと黒髪にかかる夜の雪であるとした。
〔備考〕詞寄類の中に、「黒髪」を恋の詞として挙げたものはない。しかし、一句に恋の情が漂うことは疑いえず、「乱髪」などに準じて、これを恋の詞としておきたい。

うたへに負ケて所領追るゝ　　蕪村

名オ10　雑
〔句意〕訴訟に負けて所領地から追い出される。
〔付合〕①前句を夜の雪の中にしかたなく出て行くさまと見込み、②家族ぐるみ住んでいた所を出て行く事態を想定し、③訴え事に負けて領地を追われるとした。
〔備考〕原本には「うた」の右に「訴」の字があり、「訴へ」は訴訟の意。「所領」は領有する土地で、主として中世に私的所有地をさして用いた。ここも「中世物語の体」（『大系』）であり、「妻子をもつれ、…哀れにもあわただしく落ちて行く様」（中村『評釈』）である。「訴訟のために鎌倉へ下った阿仏尼の紀行「十六夜日記」などが思いうかめられる」（『大系』）とも言われる。

日やけ田もことしは稲の立伸し　　几董

名オ11　秋八月（稲）
〔句意〕いつもは日に焼けた田も今年は稲がよく立ち伸びている。
〔付合〕①前句での領地を追われるという点に着目し、②その人の悔しくも未練の残る心の内を想像し、③日焼田も今年はよく稲が成長しているのに、

との思いを一句にした。

〔備考〕「日やけ田」は「日焼田」で、水が涸れて乾いた田。諸注が指摘するように、所領を追われる者の未練がましい感慨を付けたのであろう。『蕪村連句』に指摘があるように、「訴→新田」（『類船集』）は付合語で、その連想もあるのかもしれない。

祭の膳を並べたる月　　樗良

名オ12　秋八月ないし三秋（月）　月の句

〔句意〕祭りの祝い膳を並べたところに、月が光を差している。

〔付合〕①前句に豊作の相を見て取り、②その後の収穫祭へと想像を進め、③月下に祭礼のお膳を並べるとした。

〔備考〕葵祭が四月（現在は五月）の行事であったことから、「祭」は本来的に夏の季詞。ただし、ここは「月」があるので、収穫の感謝を込めての秋の祭礼ということになる。

小商人秋うれしさに飛歩き　　蕪村

名ウ1　三秋（秋）

〔句意〕小資本の行商人が秋の売れ行きをうれしがって飛び歩いている。

〔付合〕①前句に祭礼のめでたく豊かな気分を感じ取り、②その余沢にあずかる外来者を想定し、③秋の小商人がうれしそうに飛び回っているとした。

〔備考〕「小商人」は零細な資金で商売をする者。ここは行商の者と見て間違いない。中村『評釈』は、打越と前句は宵宮の座敷であったのが、前句と付句では直会の場となって、後者には小商人も参加していると見ており、行き届いた解といえよう。

相傘せうと嫗にたはれて　　几董

名ウ2　雑　恋（相傘）

〔句意〕相合傘をしようと、老婆に戯れかかって。

〔付合〕①前句を調子のよい気さくな人物と見定め、②その人がふざけて軽口をたたく場面を想像し、③老いた女性に相傘しようと誘いかけるとした。

〔備考〕「相傘」は「相合傘」に同じく、主として男女二人で一本の傘を差すこと。「嫗」は老女で、オウナとも発音する。「たはれ」は戯れること。

いにしへも今もかはらぬ恋種や　　樗良

名ウ3　雑　恋（恋種）

〔句意〕昔も今も変わらない、恋の情というものよ。

〔付合〕①前句を恋の戯れと見定め、②これをよそから見た人がどう思うかを考え、③いつの世も変わらないのが恋というものだとした。

〔備考〕「恋種」をコイダネと読めば、恋心を起こさせる要因の意。コイグサと読めば「恋草」に同じく、恋の思いが激しくつのること。ここは後者とするのが適当であろう。「や」は詠嘆の間投助詞。中村『評釈』に、一句は細川幽斎の「いにしへも今もかはらぬよの中に心のたねをのこすことの葉」（『衆妙集』）を踏まえるとの指摘があり、それはまず動かないところである。

何物語ぞ秘めて見せざる　　蕪村

名ウ4　雑　恋（内容）

〔句意〕何の物語なのだと聞かれても、隠して見せることがない。

〔付合〕①前句の恋心には昔も今も変わりがないという点に着目し、②古い物語を夢中で読む若い女性を想定し、③何の物語かは秘めて明かさないとした。

〔備考〕詞寄類による限り、「物語」も「秘める」も恋の詞としては登載されていない。それでも、『源氏物語』『伊勢物語』などが恋の手本であり続けたことは周知であり、それを秘めて見せないという点に、恋の情を汲み取るべきであろう。「ぞ」は体言などを受けて指定的に強調し、聞き手に働きかける係助詞で、下に「と問へど」などが省略されたものと見られる。

象潟（きさがた）の花おもひやる夕間暮（ゆふまぐれ）　嵐山

名ウ5　春三月（花）　花の句

〔句意〕夕暮れ時に、象潟の花のことを想像する。

〔付合〕①前句を読書に熱中する姿と見定め、②『おくのほそ道』を読みつつ風雅に遊ぶ人を想定し、③象潟の花を思いやる夕暮れであるとした。

〔備考〕「象潟」は現秋田県にかほ市にかつてあった入江で、文化元年の地震で土地が隆起するまで、松島と並ぶ景勝地であった。「象潟の花」とは、伝西行歌の「きさがたの桜は波にうづもれて花の上こぐあまの釣舟」（『継尾集』等）をさすと見られ、『おくのほそ道』にも「むかふの岸をあがれば、「花の上こぐ」とよまれし桜の老木、西行法師の記念をのこす」とある。同書をひもといて、「西行、芭蕉の心を慕う風雅の体」（『蕪村連句』）であろう。「夕間暮」は夕方の薄暗い時分で、「夕目暗」の宛字であるという。

朧（おぼろ）に志賀の山ほとゝぎす　几董

挙句　三春（朧）

〔句意〕朧にかすんだ志賀の山に時鳥が鳴き過ぎていく。

〔付合〕①前句を夕方の象潟の花を思っているものと見換え、②その人は別の花の名所にいると考え、③朧々とした志賀の山に時鳥が鳴くとした。

〔備考〕「志賀」は近江国滋賀（現滋賀県大津市の北部）で、「志賀の山桜」として知られる歌枕。「象潟に志賀を配した名所付け」（『大系』）であり、『全集』に指摘があるように、「郭公→花」（『類船集』）は一般的な連想の範囲。中村『評釈』によれば、この句の「朧」は、『おくのほそ道』の出立の場面に「明ぼのゝ空朧々として」とあるのを意識したものといい、その可能性も否定はできない。

以上のようにこの歌仙を読み終えて、率直に感じるのは、『もゝすもゝ』もそうであったように、やはり芭蕉が一座する連句（ことに晩年のそれ）との間には相応の違いがある、ということである。冒頭にも記したことながら、前掲「蕪村連句の傾向―『もゝすもゝ』の分析から」より『もゝすもゝ』の傾向を確認しておくと、「一つは、蕪村・几董が奇談的な内容を好み、変わった題材を使用しがちだということ」、「もう一つは、…前句からひらめいたことがらによって一句をなしがちだということであり、…その「趣向」が、多くの場合、自分たちの嗜好に引き付けて選ばれるということ」の二点になる。これらは当該の「薄見つ」歌仙にもほぼそのまま当てはまる、と言ってよさそうである。

まず、題材の点から見ると、当代の日常的生活を扱った付合がきわめて少ないということを、一つの事実として挙げなければならない。初オ4の「紀行の模様一歩一変　嵐山」を起点に、「貫之が娘おさなき頃なれや　樗良／半蔀おもく雨のふれゝば　蕪村／さよ更て弓弦鳴せる御なやみ　嵐山」（初オ5～初ウ1）と王朝風の句が連続するのをはじめ、「さかづきさせば逃る県女　嵐山／若き身の常陸介に補せられて　蕪村」（初ウ6・7）、「五尺の剣打おふせたり　樗良／満仲の多田の移徒日和よき　蕪村」（初ウ12・名オ1）、「黒髪にちら〳〵かゝる夜の雪　樗良／うたへに負ヶて所領追るゝ　蕪村」（名オ9・10）など、中古・中世を舞台にしたものが目立つのであり、「汝

にも頭巾着せうぞ古火桶　蕪村／愛せし蓮は枯てあとなき　樗良」（初ウ3・4）や「逃たる鶴の待どかへらず　樗良／銭なくて壁上に詩を題しけり　蕪村／灯を持出る女麗し　几董」（名オ6～8）など、中国趣味が横溢するものをこれに加えれば、およそ半分ほどは古典的世界を背景としていることになる。この歌仙に怪異趣味こそ見られないものの、物語めかした趣向の句は多く、これとは逆に、日常卑近な事象を探った句となると、ほとんど指摘することが難しいという状況である。そして、これは、『此ほとり』所収の他の三歌仙を通覧しても、ほぼ同様に看取されることなのであった。

続いて、付合のあり方を問題にしてみよう。目につくのは、前句を十分に吟味して趣向を立てるのではなく、前句の詞や表現に興味を喚起され、それに応じた詞や表現で一句を成していくあり方であり、初ウ2・3の次の付合などがその典型である。

我もいそじの春秋をしる　几董
汝にも頭巾着せうぞ古火桶　蕪村

ここでは、「いそじの春秋」から相応の老人を思い浮かべ、それにふさわしい「頭巾」「火桶」を付けた（前掲の通り、『類船集』に「老人→頭巾」「年寄→火桶」）のであり、また、「我も」に「汝にも」と応じてもいる。初期俳諧（貞門・談林）でも見られた四手付に近い付け方と言ってもよく、蕪村にそれを厭う意識はなかったのだと言える。付句の発想は以上の通りながら、これを一句にする際、お前にも頭巾を着せてやろうかと、古火桶に語りかける形をとったのは興味深く、これは句作段階（③）における工夫ということになる。

もう一例、名オ6・7の次の付合を取り上げてみよう。

逃たる鶴の待どかへらず　樗良
銭なくて壁上に詩を題しけり　蕪村

この場合、蕪村は、前句の鶴が逃げて帰らないということから、すぐさま黄鶴楼をめぐる故事や、これに基づく崔顥「黄鶴楼」（『唐詩選』）の詩句「昔人已ニ白雲ニ乗ッテ去リ、此ノ地空シク余ス黄鶴楼、黄鶴一タビ去ツテ復タ返ラズ、白雲千載空シク悠悠」を想起したものに相違ない。そして、〈漢詩句→漢詩人→詩人の行為〉と想像を進め、貧しい漢詩人が行ないそうなことへと思いを及ぼして、一句をなしたのであろう。その点に工夫はあるとしても、故事自体に、貧しい老人が壁上に絵を描くということがあったのだから、蕪村がこの故事をも視野に入れていたとすると、独創性はただ「詩を題し」の一点ということになる。手近な類書などには見いだせないにせよ、崔顥詩がそれに基づいていることからも、特殊な故事であったとは考えられず、視野に入っていた可能性が大きいであろう。仮にそうでないとしても、前句からすぐに崔顥詩を思い出し、これによって趣向を立てたということは動かない。いずれにしても、前句の十全な吟味から独自な趣向を立てていく、芭蕉流の付け方とは異なると言ってよかろう。

蕪村以外の例として、初ウ8・9の次の付合も見ておこう。

八重のさくらの落花一片　几董
矢を負し男鹿来て伏す霞む夜に　樗良

これは、八重桜の落花という前句に対し、矢を受けて伏した牡鹿を付けて、意外性のある付合にも見える。しかし、「鹿」が詩歌の伝統の中では、秋の花が咲く野原に多く配されてきた（前掲の通り、『類船集』に「鹿→花野」）ことを思えば、ここはそれを敢えて反転させ、春の桜下に手負いの鹿を置いて、強い印象を与えようとしたものなのだと言えよう。また、「霞→花の岑」（『類船集』）も一般的な連想の範囲なのであるから、付合を大きく支えるのは詞の連想であったことになる。一句が作り物に感じられてならないのも、そうした点によるのであろう。なお、これに付けた初ウ10「春もおくある月

の山寺　蕪村」は、鹿が倒れ伏した場を定めたものと見る以外になく、そうであれば、前述の通り、打越と前句では花の下に倒れる鹿を描き、前句と付句では山寺近くの月下に倒れる鹿を描いたことになり、観音開き（前句をはさんで打越と付句が類似したものになること）とも言いうる三句ということになる。

こうした展開上の問題点は、ほかにも指摘することができる。たとえば、初ウ3～5の次の三句なども、その一例と見られよう。

汝にも頭巾着せうぞ古火桶　　蕪村
　愛せし蓮は枯てあとなき　　樗良
小鳥来てやよ鶯のなつかしき　　几董

この場合、樗良句をはさんで、蕪村句は古火桶に対して「汝にも頭巾着せうぞ」と呼びかける体であり、几董句は小鳥に対して「やよ」と声をかけ、鶯への伝言を頼むという体裁である。好ましいあり方とは言えず、逆の見方をすれば、作者たちにはそうしたことを嫌う意識があまりなかったということになる。また、右に挙げた初ウ8「八重のさくらの落花一片　几董」も、その前の「さかづきさせば逃る県女　嵐山／若き身の常陸介に補せられて蕪村」（初ウ6・7）で描かれた宴席の背景を付けたとしか考えられず（初ウ9を任命式の場に見換えたとする案は、「県召」が一月であるのに「桜」は三月である点からも、成り立たない）、三句がらみ（連続する三句が同一の場面を描いて変化に乏しいこと）であることになる。王朝風の句が続く前掲の例（初オ4～初ウ1）なども、同様に、展開上はあまり望ましくないことであろう。

こうした事例から帰納して言えるのは、作者たちが重視しているのは、そうした式目上の非難を受けないように気を配ることではなく、前句からいかに自分の好む趣向を立てるかに専心することであった、ということである。

できるだけ自分の嗜好にかなう形で前句を受け取り、ここから思いついたことをもとに趣向を立てていくのであり、後はそれを興味深い一句としてまとめることに腐心していく。一夜に四歌仙を巻いたものゆえ、文音で練り上げた『もゝすもゝ』に比べると、総じて一句の形象には見劣りのする面があるものの、できあがった歌仙として十分な鑑賞に堪えるものであることは間違いない。要するに、『此ほとり』や『もゝすもゝ』の蕪村連句は、「前句は是（これ）いかなる場、いかなる人と、其業（そのわざ）・其位（くらゐ）を能（よく）見定め」（『去来抄』）て趣向を立てる、芭蕉流の連句とは基本的性格を異にするものなのである。日常を離れた美的世界の顕現をこそ積極的に味わうべきであり、今後はそのことをよく認識した上で、さらに多くの作品と対峙していくことが必要となろう。

〔付記〕本稿は、平成二十八年度科学研究費による研究（課題番号：16K02416）の成果の一部である。

佐藤　勝明（和洋女子大学　人文社会科学系　教授）

（平成二十八年十月十一日受理）